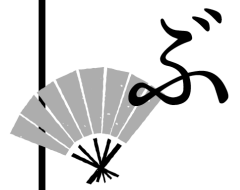


古典落語



学



落語家
立川談四楼

第十九回 ぞろぞろ

かつて

繁盛したある神社、今では参詣する人もなく、すっかりさびれてしまいました。

実は神様が出雲に縁結びに出かけたのはいいのですが、まっすぐ帰らずに諸国を経巡り、数年も留守にしたせいで、荒んでしまったのです。

「いやあ、これは申し訳ない。こんなにもさびれるとは。参詣人もいないし、ペンペン草も生えないってぐらいに荒れちゃったね。よおし、これからは仕事をするぞ」と神様。

「おや、柏手がするぞ。きれいなお嬢さんだ。待てよ、この子はその荒物屋の孫娘じゃねえか。大きくなったなあ。まあ、いかに留守が長かったかということだ。うん、なになに、この

何年かは参詣人がめっきり減り、帰りにうちで買い物をする人がほとんどいません。草鞋さえ三年もぶら下がったままです。

今日は最後のお願いです。小遣いで御神酒を奮発しました。どうぞ元の繁盛する荒物屋に戻してください」

「痛いところを突かれたね。大丈夫、繁盛させますから。とにかく好物の酒をいただきましたからね」

「どこ行ってたんだい？」

「あ、お婆ちゃん。私、お社にお願いをしてきたの」

「およし。ちっともご利益なんかないじゃないかね」

「でも心を込めてお願いしてきたのよ」

と話しているところへ突然の雨。

「降ってきやがった。草鞋をくれ」

「そのぶら下がってるのを引いてください」

「銭はここへ置くぜ。助かったよ」

「ほらお婆ちゃん、ご利益があったわ」

「たまたまだよ。だって草鞋は三年も売れなかったんだよ」

「おい、草鞋をくれ」

「最後の一つが売れてしまいました」

「このぶら下がってるのは違うのかい？」

「あ、ありましたね。どうぞ引いて」

客が引いて歩き出すと天井から新しい草鞋がぞろぞろ。客が

来て引っ張るとぞろぞろ。たちまち店は大繁盛。

面白くない

のは向かいの髪結床かみゆいどこ（床屋）のオヤジで。

「草鞋が飛ぶように売れてるぜ。羨ましいな、オレんところは

客が一人も来ねえのに。草鞋を引っ張るとまた草鞋がぞろぞろっ

と出てくるよ。どんな仕掛けなんだろう。ちょっとごめんよ」

「あ、床屋の親方。ああこれですか」と孫娘。酒を供えて熱心

にお願いしたらこうなったと知らせる。よし、オレもってんで

親方、酒を調達して社へやってくる。

「大きな音の柏手だね。誰だい、見覚えがあるぞ。ああ床屋の

親方だ。老けたねえ。何、向かいの荒物屋のようにうちも繁盛したい？ 分かった、そうするから酒をそこに置いて帰ってくれ。二日酔いで頭が痛いんだ」

床屋が店に戻ってくると、何と店の前は十重二十重とえはたえの人だかりができています。

「何です、皆さんは？」

「客なんだけど、オヤジがいねえんだよ」

「私がオヤジ」

「待たせるな。早く仕事しろよ」

えっへっへっへ

、嬉しいねえ。これだけの客をやると、また後から新

しい客がぞろぞろって。たまらないね。

「最初のお客さん、どうぞ」

「オレは頭じゃねえんだ。女の子に会いに行くんで髭ひげを当たってそ（剃って）くれ」

ホクホク顔の親方、髭を温め、シャボンを塗り、剃刀かみそりで髭をスーッと剃ると、後から新しい髭がぞろぞろ。

いいオチです。この噺はなし、教科書にも載り、ご存知の方も多いでしょう。演者によってずいぶん演出の変わる噺でもありません。